

貴重書紹介

近世の疫病 ―小城藩日記データベースを用いて―

解説

現在、全世界で新型コロナウイルスが猛威をふるっているが、江戸時代の人びとは疫病に対し、どのように立ち向かっていたのだろうか。附属図書館所蔵小城鍋島文庫の史料を用いた「小城藩日記データベース」により、事例を紹介したい。

このデータベースは、江戸時代250年余のうち、126年分の「日記目録」（小城鍋島家の政治などの記録である「日記」の記事目録）をもとにしており、どんな記事が「日記」（84年分）にあるか、検索することができる。試しに「疫病」で検索すると、約7万点の記事のうち、19件しかヒットしなかった。しかしこのデータベースでは、検索語と関連している語句を自動的に抽出できる。「疫病」ともっとも関連している語は、「流行」である。今度は「流行」で検索すると、92件ヒットした。「流行」の関連語では、「疱瘡」と「祈祷」が気になった。

「疱瘡」は天然痘のことであり、一度罹れば二度目はないという知識にもとづき、日本でもいろいろな予防法が考えられ、幕末にはヨーロッパから牛痘法をスムーズに導入できた。「流行」の関連語として、「種痘」も1件ある。安政6年(1859)に天然痘が蔓延したため、小城鍋島家から佐賀藩へ、領民の予防接種(種痘)を要請した記事である。江戸時代、もっとも人びとを悩ませた疫病は天然痘で、その対応のため西洋医学の技術が導入されたことが、データベースからわかる。

一方「祈祷」だが、小城鍋島家は疫病が流行すると、そのつど自領内の寺社や山伏に、疫病を鎮めるための祈祷を命じていた。もともと疫病には、神仏頼みしか手段がなかったのである。他にも患者に対し「施薬」をしたという記事が見受けられるが、事例はわずかである。種痘の導入は、「日記」にみられる唯一の効果的な疫病対策であり、人びとの命を救う、画期的な出来事だったことがわかる。

(地域学歴史文化研究センター 伊藤昭弘)



佐賀藩へ種痘を要請した記事(3条目)



安政6年日記